琉球大学学術リポジトリ

アジア太平洋域における大学院学生の国際連携教育プログラムーダブルディグリープログラムなどの推進ー最終報告書

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学大学院理工学研究科
	公開日: 2013-09-06
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 岩政, 輝男, 土屋, 誠, 日高, 道雄, 田中, 淳一, 中村, 崇, 高江洲, 哉子, 広瀬, 裕一, 成瀬, 貫, 傳田, 哲郎, 須田, 彰一郎, 新城, 竜一
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/27434

ダブルディグリープログラムに関する協定を締結

土屋　誠（理学部海洋自然科学科）

平成23年10月、本学の理工学研究科とインドネシアの2大学(ディポネゴロ大学・ボゴール農業大学)との間でダブルディグリープログラムに関する協定を締結した。

ダブルディグリープログラムとは、より短期間に2つの大学から学位を取得するプログラムで、本学としては、初めての取り組みである。博士前期課程の場合、通常は2年で修了するので、2大学から学位を取得しようとすると4年が必要である。本プログラムの場合、両大学の博士前期課程を早ければ2年半で修了して2つの学位を取得する画期的な国際連携教育プログラムである。

このプログラムでは学位論文の研究対象を地理的に拡大して展開し、かつ両大学の教員の指導を受けることになるので、大学院生はより見識が広まり、貴重な経験を蓄積し、重要な学問的成果を上げることが期待される。その結果として、アジア太平洋地域のみならず、さらに広く国際的に活躍する人材が育成される。

平成24年の10月からは2名の大学院生が本学の理工学研究科で勉学を開始した。また平成25年1月にはインドネシアの両大学で次期の受け入れに関する準備を行った。ここでは20名の大学院生に対して面接試験を実施し、候補者のリストを作成するとともに今後のプログラム運営に関する協議が行われた。現在は博士前期課程の大学院生に関するプログラムであるが、将来博士後期課程の大学院生を対象にする可能性など、多くの話題について意見交換が行われた。

▲協定を締結して記念写真を撮影する山里眞琉球大学理工学研究科長とボゴール農業大学のDahrul Syah研究科長(右)。

▲協定を締結後、記念品を交換する山里眞琉球大学理工学研究科長とディポネゴロ大学のJohannes Hutabarat水産海洋科学部長(左)。

アジアの大学間連携によるダブルディグリープログラムに関するワークショップに参加して

日高　道雄・田中　淳一（理学部海洋自然科学科）

▲ワークショップの様子。右側のモニターには茨城大学の他キャンパスの参加者が見える。

平成22年7月16日に茨城大学阿見キャンパスで開かれた「アジアの大学間連携によるダブルディグリープログラムに関するワークショップ」に参加した。ワークショップには、茨城大学の他キャンパスの教員もテレビ会議で参加した。参加者は以下の講演者の他に、茨城大学、千葉大学、愛媛大学からそれぞれ1から数名、そして琉球大学から我々2名であった。

茨城大学においても、たとえ言語は異なっても同一内容の学位論文で2つの学位を取得することにならないよう、それぞれの大学での研究の進め方をどのようにするかが主な検討課題のように思われた。またそのために、修業年限をどうするか、マスターコースの場合2年間で可能であろうか、などについて地道に検討している印象を受けた。琉球大学でも、同様な問題が検討課題となっている。一方のボゴール農業大学の方は、合意が得られればすぐにでも開始したいという印象であった。インドネシア政府は国家予算の20%を教育関係に配分しており、インドネシア側の国際連携教育に対する熱意が感じられた。

各講演の概略は以下のようなものであった。ワークショップ終了後、農学部長室で、ボゴール農業大学（Prof. Notodiputro, Dr. Syuaib）、茨城大学（太田寛行農学部長、加藤亮准教授）、愛媛大学(遅澤克也アジア・アフリカ交流センター長)、琉球大学(日高道雄、田中淳一)の参加者が懇談を行った。今後、メーリングリストで情報を交換することとなった。また、12月6日には茨城大学でDDPに関するワークショップが開かれるということで、参加の呼びかけを受けた。

1. 文科省国際企画専門官の福田和樹氏が、3つの参考資料「質の保証を伴った交流に関する参考資料」、「我が国の大学と外国の大学間におけるダブル・ディグリー等、組織的・継続的な教員連携関係の構築に関するガイドライン」、「我が国の大学を巡る現状と改革の方向性」に基づいて講演された。文科省としては、ダブルディグリープログラムを無条件に奨めるというのではなく、各大学でメリット、デメリットを考慮しながら、教育や学位授与などの質の保証について社会的に説明のつく形で進めて欲しいと考えている印象を受けた。
2. 茨城大学農学部長の太田寛行教授による、茨城大学の国際連携教育の取組の紹介。
3. ボゴール農業大学の研究科長Prof. Khairil Anwar Notodiputroによるボゴール農業大学の大学院および国際交流取組の紹介。
4. ボゴール農業大学農業工学科長のDr.Faiz Syuaib(彼は、茨城大学大学院の修了生でもある)による、ボゴール農業大学と茨城大学のDDPの準備状況の紹介。

▲福田和樹氏

▲太田寛行農学部長

▲Prof. Khairil Anwar Notodiputro（ボゴール農業大学研究科長）

山口大学工学部のダブルディグリープログラムの取組について

日高　道雄（理学部海洋自然科学科）

平成22年11月24日　土屋誠（プログラムリーダー）・日高道雄が山口大学工学部を訪問し、江　鐘偉教授より工学部で進めているダブルディグリープログラムにお話を伺ったので、その概要を報告したい。

▲山口大学工学部（平成22年11月24日）

1. 現在中国の大学とのDDPを実施している。

(1) 修士論文は同じもので、二つの大学から学位を得る。ただし、発表は2回両方の大学で行う。

(2) 2カ国で異なる分野を学ぶことがメリットとなる。

(3) 1.5年+1.5年だったものが、相手大学の要望により、現在は1年＋1年(2年目を山口大学で学ぶ)となっている。

(4) 中国では、全国統一試験があるので、大学院入学後に、学生をDDPに誘っている。
相手大学の推薦に基づいて、大学時の成績、TOEIC、研究計画、経済状況などを考慮して書類選考を行っている。

(5) 2国間で教員間の連携を目標としているが、現状では難しい。

(6) DDPのための規則は特になく、私費留学生(定員外)として扱っている。そのため、中国の学生は授業料を払っている。

(7) 他大学での履修科目は10単位を上限に認定。

(8) 1専攻で行っているが、英語科目の提供を工学部全体で対応している。

2. DDP実施上の問題点としては、

(1) 英語による講義提供とそのための教員の意識改革、大学のサポートが得られないことなどがある。

(2) 苦労された点としては、カリキュラムの単位認定(シラバスに基づく)、履修モデルの作成、一部の講義を夏休み中に行うことなどであった。

江先生との話し合いの後、10数年前に本学で日本語を教えていた中溝朋子先生（現在山口大学留学生センター）とその旦那さんであるカロルスさん（本学海洋科学特別プログラムの修了生、化学系の大森先生の研究室出身）とお会いできた。帰りはカロルスさんに駅まで送っていただいた。

岡山大学国際センターおよび社会文化科学研究科のダブルディグリーに関する取組について

日高　道雄（理学部海洋自然科学科）

平成22年11月25日、土屋誠（プログラムリーダー）・日高道雄が岡山大学国際センターおよび社会文化科学研究科を訪問し、ダブルディグリープログラムに関する情報を収集したので、その概要を報告したい。

1. 事務、制度的なことについて国際センター事務室の原田美樹主査、内藤賢一郎主査、大学院係遠藤和仁氏に伺った。

(1) 受け入れがメイン、派遣は制度はあるが実質ゼロ(研究科の募集要項に記載)
(2) 入学料、授業料は不徴収、大学の宿舎が1年半までは保証されている(6900円/月)
(3) 学生は両大学に、同時に二重在籍(2年間)、岡山大学には1年半滞在（3年間で2つの学位を取得）
(4) 入学前に相手大学で取得した10単位を認定、さらに岡山大学に在籍中に他大学(相手大学)で取得した単位を10単位まで認定
(5) 学生には日本語一級を要求、講義は日本語で行う
(6) 春と秋にセミナーを相手大学で行い、その際に入試を行う。事業推進経費より外国出張旅費を中心とした予算措置
(7) 中国に事務所を置く(事務所長は社会文化科学研究科から出すが、常駐せず形のみ)
O-NECUS運営委員会が運営
(8) 学生への支援としては、最初の6ヶ月間3万円/月を国際交流基金より支援(交流協定に基づく短期留学生には、日本学生支援機構JASSOより8万円/月を支援)

2. 次いで、社会文化科学研究科を訪問し、荒木勝研究科長、石井康裕専門職員（社会文化科学研究科等担当）に話を伺った。

(1) 学生には2つの修士論文を要求、テーマは独自であるが同じような分野で、タイトルや目次（内容）も異なる。
(2) 東アジア国際教育研究協力センター、専攻長会議、下部委員会で運営
(3) 学生には日本語一級を要求するとともに、面接を行い語学力、研究姿勢を評価する(一次面接)、次いで受け入れ教員とのマッチングを考慮(スカイプによる面接を行う)
(4) 岡山大学と相手大学の教員が共同で研究指導を行う、年1回は相手大学の指導教員、学生と3者で面談を行う(指針に書かれている)
(5) カリキュラムについては、それぞれの大学の講義を紹介しあう。法系、文系より各一人、約1週間の講義を行う(単位はまだ無い)。日本語通訳付き。学部、大学院各一コマを行い、大学院生対象のワークショップも行う(ガイドライン)
(6) 既習得単位の取り扱いについては指導教員と学生で相談
(7) 正規DDPの学生は10月入学が多い。3年間で2つの学位。1年次のみでなく2年次から始める学生も。3月にdefenseを行い、6月に学位取得
(8) ビザ取得の手続きなどは、国際センター(3研究科を担当)で世話をするが、ドクターは社会文化科学研究科のみなので、担当教員が世話する。
(9) O-NECUSはトップダウンで決まったが、実施委員会で試行錯誤しながら運営。
受け入れがメインだが、双方向性をもたせるため、岡山大学学生が語学研修に行っている。渡航費のみ自腹。半年程度、留学扱い、単位も認定、1400元の奨学金付き。

▲荒木勝教授（左、岡山大学社会文化科学研究科長）と土屋誠教授（右、本学国際連携教育プログラム代表）

ボゴール農業大学で開催されたダブルディグリープログラムに関するワークショップ参加報告

土屋　誠・日高　道雄・中村　崇（理学部海洋自然科学科）

平成22年12月27日ボゴール農業大学（IPB）のキャンパスにおいて、ダブルディグリープログラム（DDP）に関するワークショップが開かれた。IPBのHerry Suhardiyanto学長の歓迎挨拶、土屋誠プログラムリーダーの挨拶の後、下記のような発表が行われた。

▲学長、国際担当の方々に来訪挨拶、懇談

1. 基調講演
2. 琉球大学とIPBのDDPの進捗状況について
3. 茨城大学とIPBのDDPの進捗状況について
4. 愛媛大学とIPBのDDPの進捗状況について
5. 千葉大学とIPBのDDPの進捗状況について
6. フランスの大学とのDDPの現状と問題点
7. バンドン工科大学とドイツのクローニンゲン大学とのDDPについて
8. オランダの大学とのDDPの現状と問題点
9. DDPに関する意見交換

ボゴール農業大学では各専門分野別に、日本、フランス、ドイツの大学とDDPに関する議論を行っている。またEUが進めているエラスムス・ムンドゥス計画に参画し、活発な国際連携教育を推進している。それぞれのプログラムの進捗状況、課題などが報告され、有益な情報交換であった。

▲DDPワークショップの風景

どの分野においても完全な双方向の交流が確立されているわけではないようである。私たちにも琉球大学の大学院生がインドネシアで学ぶ利点は何かという質問が寄せられた。自然科学、特に生物学や海洋科学の諸分野を対象として勉強している大学院生にとっては生物多様性の中心であるインドネシアで学ぶ意義は大きいと答えた。また私たちはサマープログラムの開催や共同研究の推進などDDP以外の活動も考えているので多様な連携教育の実施が可能であるとも発言した。

後日談であるが、IPB内で行われた反省会の中で、本学との議論が最も進んだものであるとの評価を得たという連絡が入っている。

翌12月28日午前中には、本DDPに関わる水産海洋科学部の主要メンバー3名（Yusli Wardiatno, Mukhlis Kamal, Luky Adrianto各氏）と実務的な点およびDDPに関する協定案についてつっこんだ議論を行った。

▲DDP協議風景。左からIPBの Yusli Wardiatno, Mukhlis Kamal, Luky Adrianto各氏。

▲琉球大学の研究者が訪問したときに利用できる部屋を用意してくれていた。

ボゴール農業大学、ディポネゴロ大学とのダブルディグリープログラムを主とする国際連携教育に関する報告

土屋　誠・日高　道雄・中村　崇（理学部海洋自然科学科）

平成23年3月14-19日にインドネシアを訪問し、ダブルディグリープログラムに関する意見交換、共同研究などを行った。

1. ボゴール農業大学でダブルディグリープログラムに関する意見交換

ボゴール農業大学の水産海洋科学部とは過去に数回議論を重ねてきた。今回は学生がプログラムに参加するスケジュールと、単位の履修方法について細部を重点的に議論した。最初に新しく国際協力担当の副学長に就任したDahrul Syah教授を訪問し、今までの経緯の説明を行った。次いで同学部の3名の先生方（Yusli Wardiatno, Mukhlis Kamal, Luky Adrianto）と双方の修了要件を満たすための具体的な方法や大学院生の修学スケジュールについて意見交換を行い、概ね同意が得られた。

今回は本年度最後の会合となることから、大学間交流協定からさらに踏み込んだ国際連携教育のための協定書(案)のたたき台作りがおこなわれた。プロジェクターを用いて、参加者全員がダイナミックに議論に参加しながらの作業が行われ、第一章の“Introduction”から、メインとなる“Double Degree Program”に加え、双方向の共同研究促進を狙った“Collaborative Research”、第4章“Student and staff exchange”までの骨組が形づくられた。これらは相互にとって有益なプログラムを運営していく上で最も重要なプロセスあり、議論と同時に、お互いの持っている独自の教育・研究についてのバックグラウンドを鑑みつつ、プログラムを出来るだけ円滑に進めようという双方の意気込みが盛り込まれた。

2. ボゴール農業大学臨海実験所訪問

国際連携教育の一環として進められている国際サマープログラムにボゴール農業大学が参加する可能性があるので、その実施場所として可能性がある野外教育施設を見学した。ここには8名の職員が勤務している。やや離れた港に船が係留されていた。学生に対しては沖合に出て沿岸漁業および沿岸管理に関する実習、あるいは魚類やベントスの生態に関する実習が提供されている。広い敷地にはウナギの養殖施設が建設されており、年齢が異なるウナギが大量に飼育されていた。これは日本人の指導によるものである。教員用宿舎と数10名が宿泊可能な学生用宿舎が用意されている。同大学は北側の海岸にも研究教育施設を有している。

▲臨海実験所のウナギ養殖タンク

▲臨海実験所のウナギ調理施設

3. ディポネゴロ大学でダブルディグリープログラムに関する意見交換

3月17日ディポネゴロ大学の水産海洋科学部を訪問し、学部長のJohannes　Hutabarat教授、国際連携教育担当の副学部長のAmbaryanto教授、大学院副研究科長（財務担当）のDwi　Snarti教授、大学院特別プログラム担当のStrisno Anggoro教授、琉大とのDDPを担当しているDiah Permata講師、フランスの大学とのDDPを担当しているIta Widowatini講師、そして琉球大学から土屋　誠、日高道雄、中村　崇の3名が参加して、DDPに関する詳細な協議を行った。これまでに数度協議を行っており、概略についてはほぼ理解が一致しているため、今回は学位審査委員会の構成、入学から修了までの年間スケジュール、そして他大学で取得した単位認定に関することなどについて主に話し合った。

(1) スケジュール

2011年9月にディポネゴロ大学に入学した学生について、2012年1月頃にDDPへの申請の募集（GPA3.25以上、TOEFL500点以上を要求）を行い、さらにディポネゴロ大学で10-15名に絞り込んだ後、2月に琉球大学教員によるインタビューを行い、DDPとしての最終選考を行う。4月に琉球大学に入学するが、引き続きディポネゴロ大学にて学習し、2012年9月から1年半(3学期間)琉球大学にて学習する。琉球大学に来るまでにTOEFL550点以上を取得するよう指導する。2014年3月に琉球大学で学位取得する見込みである。1学期分のセミナー、特別研究の単位については、ディポネゴロ大学で取得した単位を認定することが可能である。琉球大学で学位取得後、学生はディポネゴロ大学にもどり、半年以内にインドネシアで学位を取得する。トータルの在籍期間は、琉球大学では2年間、ディポネゴロ大学では2.5−3年となる。

(2) 学位審査委員会

学位審査委員会はそれぞれの大学での審査委員会に、副査として相手大学の指導教員を加える。この副査は外部審査員として、論文を審査してコメントを送る。

(3) 今後のプロセス

DDPに関する協定MOAを研究機関間で締結する。MOAの案を琉球大学側で作成し、ディポネゴロ大学に送付する。本学では、この案を国際連携教育プログラム運営委員会、OIMAP運営委員会、理工学研究科専攻主任連絡会などに説明した後、研究科委員会で承認してもらうことを目指す。

▲Hutabarat水産海洋科学部長と。

▲ディポネゴロ大学での協議風景

ボゴール農業大学の研究科長が琉球大学を表敬

平成23年7月15日、インドネシアのボゴール農業大学のDahrul Syah研究科長、Faiz Syuaib国際交流コーディネーター(日本担当)、海洋水産学部のYusli Wardiatno水産資源学科長が本学を訪問し、佐藤良也研究国際交流担当理事、山里眞理学部長を表敬し、今後の交流に向けた意見考案を行った。ボゴール農業大学の大学院組織は本学と構造が異なり、Dahrul Syah研究科長はすべての大学院をまとめる要職におられる。

ボゴール農業大学は、長年、本学の理学部と農学部が中心となって交流を継続してきており、今回の訪問を機に一層の学生と研究者の交流の発展が期待される。特に理学部（理工学研究科）では近年ダブルディグリープログラムの議論を進め、本年10月には協定を締結して新しい段階に入る。またその他の交流も盛んであり、Yusli Wardiatno水産資源学科長は西表島で開催されていた国際サマープログラムに参加された後、本学に立ち寄られたもので、一緒に参加していた大学院生は更に一カ月以上沖縄で研究活動を続ける。

▲佐藤理事に記念品を贈呈するDahrul Syah研究科長

▲山里理学部長と歓談するDahrul Syah研究科長、海洋水産学部のYusli Wardiatno水産資源学科長、Faiz Syuaib国際交流コーディネーター(左から)

2カ国(インドネシアー日本)DDPミニシンポジウム「農学系分野での国際ダブルディグリー・プログラム(DDP)を巡る課題と今後の展開に向けて」に参加して

日高　道雄(理学部海洋自然科学科)

平成23年12月2日午後1時より6時まで、茨城大学農学部(阿見キャンパス)で開かれたDDPに関するミニシンポジウムに参加したのでその概要を報告したい。

茨城大学農学部では、平成23年度にボゴール農業大学(インドネシア)から2名の学生をDDPに迎え、同時に茨城大学から2名の学生をボゴール農業大学に派遣することとなった。三村学長特別補佐の挨拶の後、文科省高等教育企画課国際企画室の佐藤邦明専門官が、近年アジアとの教育における国際連携がますます重要となってきており、DDPのような国際連携教育を本省としても重視しており、茨城大学での積極的取組は意義がありさらに進めていってほしい、と挨拶された。ついで、ボゴール農業大学のYonny Koesmaryono副学長が、ダブルディグリープログラムに期待する旨の挨拶を行った。またインドネシア大使館からEdison Munaf教授も修士課程だけでなく、博士課程にもDDPを進めて欲しいと挨拶された。

その後、茨城大学と琉球大学におけるDDPの取り組みに関する発表がなされた。茨城大学では、夏期および冬期の学生ワークショップ(2006-)やIPBにおける夏期コースおよび茨城大学における冬期コース(2009-)を経て、2011年10月にDDPが開始されたこと、カリキュラムの詳細および日程が紹介された。今後はインドネシアの複数大学、日本の琉球大学も含めた複数大学でDDPのネットワークに発展させたいという夢(将来計画)も紹介された。琉球大学のDDPについては、日高が、琉球大学、および本学に特徴的な教育研究分野について紹介した後、海洋環境学分野での琉球大学とインドネシアの2大学(ボゴール農業大学、ディポネゴロ大学)間のDDPの内容について紹介した。

ついで、ボゴール農業大学、ガジャマダ大学、ウダヤナ大学、琉球大学、愛媛大学、茨城大学の代表者により、DDPの課題と今後の相互協力のあり方についてパネルディスカッションが行われ、下記の点について議論が行われた。

(1) 異なる内容の2つの論文を提出することについて

異なる内容の論文を2つ、それぞれの大学に提出するための具体的取り組みについて質問が出た。今回茨城大学に入学したボゴール農業大学の学生について、一つのテーマの中で異なるアプローチ(手法)を用いた研究をそれぞれの大学で行うことにより、可能であるという回答が茨城大学よりあった。

(2) 質の保証について

「質の保証」ということが近年謳われているが、DDPではどのようにそれを保つのかと言う質問が佐藤専門官よりあり、琉球大学ではDDP学生は1年半滞在するので、渡日前の半年間に必要な準備を行えば従来の学位論文に劣らない研究が可能であること、修士論文については審査会が評価することを答えた。それに対し、論文に関しては、審査委員にそれぞれ互いの指導教員が含まれるのは分かったが、実際の研究等に関してはどのように行っていくのか、互いの大学を指導教員が行き来して指導できる体制をとるのか、そこの整備も必要ではと言うコメントをいただいた。

(3) 単位の認定について

他大学院等からの単位を、10単位を超えない範囲で認めることができる規則に関して、今後15単位に引き上げられる可能性もあり、もしそうなれば、インドネシアの大学はCourse work中心なので、10単位から15単位に認定単位が上がれば、日本人学生にとってメリットになるという意見があった。

(4) 学生に対する責任体制について

文科省としては、日本の大学に在学している間の学生の教育条件(安全面も含めて)に関して、大学を指導する責任がある。一方インドネシアでの教育条件に関しては口出しをする立場にない。日本の大学に提出された論文をインドネシアの大学が修士論文として認定するような場合も、文科省としては良いとも悪いとも言わない。ただ、DDPを運営する大学としては、プログラムに参加する学生について責任を持つことになる。

(5) その他

愛媛大学の遅沢先生より、DDPでは、両大学の違いが重要であると言うコメントがあった。DDPの期間について、琉球大学の2年半(場合によっては3年間)というのは長すぎるのではないかという意見がインドネシア大使館からあった。インドネシア政府からの奨学金が2年間であることを考慮しながら、渡日前および帰国後の履修のあり方を今後説明していくことが必要と感じた。

ミニシンポジウム修了後、ちょうどボゴール農業大学と茨城大学間の冬期コースの学生の発表会があったので、発表を聴講した後、茨城大学を後にした。

▲ボゴール農業大学のFaiz博士によるDDPの紹介

▲パネルディスカッション風景

▲DDPミニシンポジウム終了後の記念写真

2ヵ国（インドネシア - 日本）DDPミニシンポジウム報告書

高江洲　哉子（理学部学務担当専門職員）

1. 日程等

開催日時:平成23年12月2日（金）13:00-18:00

開催場所:茨城大学農学部

参加大学:日本（7大学）・インドネシア（3大学）

参加者:日高　道雄（理学部海洋自然科学科教授）

　　髙江洲　哉子（理学部学務担当）

2. シンポジウムの概要

茨城大学からの案内により、インドネシアの大学教員・大使館職員、インドネシアとDDPを行っている日本の7大学教員等・文科省高等教育企画課の専門官が参加しミニシンポジウムが茨城大学において開催された。

シンポジウムでは、2ヵ国の大学のDDPの現状や課題が発表され、パネルディスカッションにおいては、DDPの履修等に関する討論や意見交換等が活発に行われた。

また、文科省の佐藤専門官からもDDPは国際化に向けた有意義な事業であるので、さらに発展させていくよう依頼がされた。さらに、専門官からは、大学院の「質の保証」を念頭に学生の指導体制やカリキュラムを組んでいくよう要望もあり、単位認定について上限単位数の変更が文科省で検討されている旨の報告もされた。

プログラムの間には、茨城大学において今年度DDPに合格した2名のボゴール農業大学の学生の授与式も行われ、初めての学生の受入れを参加者で祝った。茨城大学は、また、日本人の学生2名もDDPでボゴール農業大学に派遣するとの報告がされた。

シンポジウムに参加し、課題として今後、当大学も日本人学生の派遣や履修指導等の指導教員の体制等の整備が必要と考えられる。

▲講演する日高先生

▲シンポジウム会場